

東京音楽大学 作曲指揮専攻 作曲「芸術音楽コース」

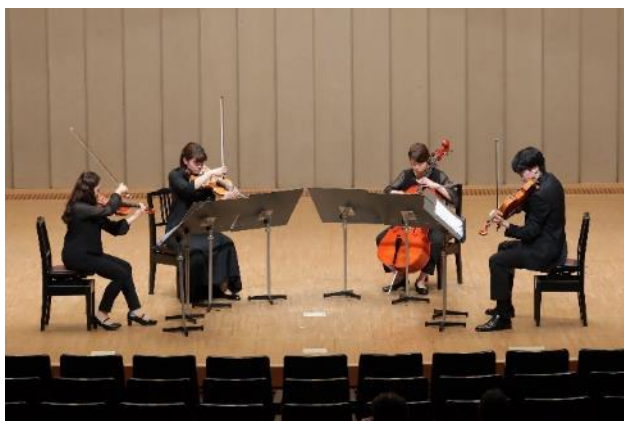
第 17 回学長賞受賞作品 選考演奏会

2019.5.31 東京音楽大学 100 周年記念ホール

譜面による予選審査を通過した十数作品の中からノミネートされた 5 作品が本選会で演奏され、審査の結果選ばれた最優秀作品には、東京音楽大学学長賞（賞金 10 万円）が授与される。

今年度は、上田素生さん（3 年）の作品「picoplanktonic」と、我妻英さん（2 年）の作品「2 台のマリンバとハープのための音楽」の 2 作品が、第 17 回学長賞を受賞した。

■ 受賞作品



上田 素生 : picoplanktonic



我妻 英 : 2 台のマリンバとハープのための音楽

■ 入選作品



麻生 海督 : ごびらっふの独白



高野 裕也 : 花明 左手ピアノと 8 人の奏者のための



我妻 英：獵奇歌 ソプラノとヴァイオリンのための
～夢野久作の短歌による～

■ 審査員

西村 朗、糀場 富美子、藤原 豊、原田 敬子、中橋 愛生

■ 講評 中橋愛生准教授

今回、4名5作品が演奏された訳ですが、どの作品も演奏が一筋縄ではいかない、難しい演目だと思います。演奏者の皆さんはいずれも真摯に作品と向き合ってください、見事な表現としていただいたことにまず、深く感謝したいと思います。

作曲者の皆さんはおそらく、リハーサルの段階から演奏者と色々と話を重ね、得ることが多かったと思います。そのような体験というのは、これまでに数多くなされているとは思いますが、一回一回というものはやはり新鮮なものですので、まずプレイヤーと演奏会後の感想というものもあわせて吸収して頂きたいと思います。

今回演奏された5作品、いずれも力作だと思います。審査が長引いたことからもわかるようになかなか難しいものでして。私個人の所感といたしましては、譜面上の難しさというものに捕われるよりも、ちゃんと自分の書きたい音を探して書いているということが、ストレートで伝わってきて、それがとても嬉しかったです。東京音楽大学という同じ場所で学んでいるということもあるのか、何となく音の方向性というか好みといいますか、若干似通っているとも感じなくはないのですが、この先、それぞれの個性というものを磨いて頂ければと思います。



西村朗教授より、賞状と賞金の授与



■ 上田素生さん コメント

ご指導いただいた先生方、本日来場いただいた方、演奏していただいた皆様に心よりお礼申し上げます。僕は作曲という行為がすごく苦しくて、何度も作曲とは何かという根本的な壁にぶつかり、何度も考え直して苦しみ苦しんでいますけれども、それでも常に心には、「聴き手がどう思うか」とか、「これを聴いて音響はどうか」など、「聴くこと」を常に最優先で考えていて、「聴いて楽しめる音楽」というものを目指しています。「聴くことによって、すべてが完結する」という曲を目指して、これからも精進してまいります。

■ 我妻英さん コメント

大変身に余る光栄で恐縮しております。ひとえに演奏者の皆さん、ご指導いただいた先生方、審査していただいた先生方と、聴いてくださった方々のおかげだと思います。私が一番尊敬する現代作曲家、アルフレート・シュニトケが「合奏協奏曲第1番」という作品を書いたあとに大変な成功を収めて、「こうやって成功を収めたからには、次回は絶対に失敗する作品を書かなければならない」と言ったという話がありますが、私も同じ心境で、この次は絶対、誰にも評価されない曲を書かなくてはならないという思いで今いっぱいです。

※実際は本日演奏された5作品のほかに、福丸 光詩さん（4年）の作品もノミネートされていたが、編成の都合上、演奏は持ち越しとなった。

（広報課）